## 推動殼の曲げ応力の近似的解法について

深 津 鋼 次 機 械 工 学 教 室 (1967年9月7日受理)

# On an Approximate Calculation for Arbitray Shells under Pure Bending

## Kōji FUKATSU

Department of Mechanical Engineering (Received September 7, 1967)

The pure ebending problems of thin walled tubes have usually analyzed by Ritz's direct method in variational problems.

But in this case if we adopt Fourier series as the camparison functions which mean the displacement of a section, these series are not always constricted, because these have no physical meaning except to satisfy the boundary conditions.

As the comparison functions if we use the functions which satisfy mechanical conditions as well as boundary conditions, these functions will be correcter than the comparison functions which satisfy only boundary conditions.

We have considered the substantial force, which flatten a shell, to define the form of displacement functions, used the displacement functions as the comparison functions, and determined easily the bending stress of shells by the method of strength of materials.

## ▶ 1. 緒 言

4

薄肉管の純曲げ問題には、Karman<sup>1)</sup>, Timoshenko<sup>2)</sup> Brazier<sup>3)</sup>, Wood<sup>4)</sup>, Rimrott<sup>5)</sup> 等によって研究された 例があるが、円管あるいは長方形断面の管以外の断面形 の少々複雑な一般推動殻に対しては、これらの方法は適 用できない。こういった問題は普通、変分問題としてリ ッツの直接法で解析される。すなわち比較函数として断 面の変位函数(フーリェ級数など)をとり、汎函数とし てポテンシャル・エネルギーをとれば、エネルギー最小 条件から変位函数は求められる。が、この場合この変位 函数は必ずしも収束性のよい函数であるとは限らない。 それは変位函数としてとったフーリェ級数には境界条件 を 満たしているということ 以外, 物理的意味 がないた め、そのフーリェ級数が真の停留函数に近いという保障 が無いことに起因する。もしわれわれが境界条件を満た すばかりでなく、力学的条件をも満たす比較函数を用い るならば、その函数は境界条件だけを満たした比較函数 よりも正確な変位函数であるはずである。

そこで筆者らは推動殻を偏平化する力の大きさは中立 軸からの距離に比例する(仮定)という物理的意味から 変位函数の形を決定し、これを変分問題における比較函 数とした。

次に一般推動殻においては応力分布が複雑なため中立 軸の位置を求めることは困難であるが、それにはまず中 立軸の位置を仮定し、エネルギー最小条件から応力の大 きさを求め、その応力分布が力の釣合条件を満足してい るかどうかを確かめる、というように try and error によって電子計算機で容易に求めることができる。

以上の考え方で断面形の複雑な推動殻について材料力 学的方法で比較的簡単に曲げ応力を求めることを試み た。

#### 2. 円弧形断面の推動殼

まず殻の最も基本的な断面形態として Fig.1 のよう な円弧形断面の推動殻に曲げモーメントMが作用した場 合の曲げ応力を求める。断面の半径方向の変位を u (中 心方向を正とする),接線方向の変位を v (時計回り方向 - 166 -





を正)とする。いま中立軸が図心を通り,中立軸からの

断面の中心線の不伸長条件 u=dv/dφ より

 $=-\frac{C}{D}\hat{v}(\varphi)$ 

距離yに比例する偏平化力  $cyrd\theta$  が Fig1 のように動 くと仮定すれば、中立軸からの距離リおよびこの偏平化 力によって生じる曲げモーメントmとは、それぞれ  $y = r(\cos\gamma - \cos\theta) \cdots (1)$ (ここに  $\gamma$  は図心の位置を表わす角度で  $\cos\gamma = \sin\alpha/(\alpha)$ -π) である)  $m(\varphi) = \int cyrd\theta \cdot r(\sin\theta - \sin\varphi)$  $= cr^{3} \left\{ f(\alpha) - \frac{\cos 2\varphi}{4} - \cos \gamma (\cos \varphi + \pi \sin \varphi - \varphi \sin \varphi) \right\}$  $= c \overset{\wedge}{m}(\varphi) \qquad \dots \qquad (2)$  $z \geq \kappa \quad f(\alpha) = \frac{1}{2} (1 + \sin 2\alpha / (\alpha - \pi) - \cos 2\alpha / 2)$ (2)式を円輪の半径方向の変位 u と曲げモーメントmとの 関係式  $\frac{d^2u}{d\varphi^2} + u = -r^2 \frac{m(\varphi)}{D} \cdots \cdots \cdots \cdots (3)$ (ここにDは板の剛性率で $D=\frac{Et^3}{12(1-v^2)}$ , v: ポアソン比)に代入すれば、その一般解に  $u(\varphi) = -\frac{cr^5}{D} \Big\{ A\cos\varphi + B\sin\varphi + f(\alpha) + \frac{\cos 2\varphi}{12} - \frac{\cos\gamma}{2} \Big( \frac{3}{2} \varphi \sin\varphi - \pi\varphi \cos\varphi - \frac{\varphi^2}{2} \cos\varphi \Big) \Big\} = -\frac{C}{D} \hat{u}(\varphi) \quad \dots \dots (4)$  $v(\varphi) = -\frac{cr^5}{D} \Big\{ A\sin\varphi - B\cos\varphi + f(\alpha)\varphi + \frac{\sin 2\varphi}{24} - \frac{\cos\gamma}{2} \Big( \frac{5}{2}\sin\varphi + \pi\cos\varphi + \pi\varphi\sin\varphi - \frac{5}{2}\varphi\cos\varphi - \frac{\varphi^2}{2}\sin\varphi \Big) + F \Big\}$ .....(5)

また、 ¥ 軸方向の変位w(殻の中心方向を正とする)は

積分定数A, BおよびFは境界条件  $v(\pi)=0$ , w(r)=0,  $\lfloor du/darphi 
floor_{arphi=\pi}=0$  より次のように求まる。  $A = -f(\alpha)(\cos\gamma + \gamma\sin\gamma - \pi\sin\gamma) - \frac{1}{12}\cos\gamma\cos2\gamma - \frac{1}{24}\sin\gamma\sin2\gamma + \frac{\cos\gamma}{2}\left\{\frac{\sin2\gamma}{2}(\pi - \gamma) + \frac{5}{2}\sin^2\gamma + \pi\gamma - \frac{\gamma^2}{2}\right\}$ 

 $B = \frac{3}{4}\pi\cos\gamma, \qquad F = -\pi f(\alpha)$ 

さて、曲げモーメントM(曲率を減少させるものを正と する) によって, R,  $\beta$ ,  $\gamma$  はそれぞれ R',  $\beta'=\beta+$  $\Delta \beta$ ,  $\gamma'$  に変化し、または断面は半径方向の変位u(中 心方向を正とする),接線方向の変位 v (時計回り方向を 正)を生じたとすれば、繊維方向のひずみ εβ は管の 中心線の不伸長条件  $R\beta = R'\beta' = 1$  および  $r \ll R; u, v$ ≪r の仮定のもとに

 $\varepsilon_{\beta} = -(u\cos\varphi + v\sin\varphi)/R - \Delta\beta \cdot y$  .....(7) ここに $\hat{y}$ は(1)式に準じ $\hat{y} = r(\cos\gamma - \cos\varphi)$ である。

無荷重状態に対するポテンシャル・エネルギー」は

また. 板厚の中心からの距離 2 における断面の接線方向 のひずみ εφ は

$$U = \frac{rE}{1-\nu^2} \int_{\alpha}^{\pi} \int_{-\frac{t}{2}}^{\frac{t}{2}} (\varepsilon^2_{\beta} + \varepsilon^2_{\gamma}) \, d\varphi \, dz \, \dots \dots \dots \dots (9)$$

上(9)式に(1), (2), (4), (5)および(6)式を用いて(7), (8)式を 代入すれば,

となる。

 $I = U - (-\Delta \beta \cdot M)$  .....(11) であり、Reyleigh-Ritz の方法によるポテンジャル・エネルギー最小条件  $\partial I/\partial \Delta \beta = 0$ ,  $\partial I/\partial c = 0$  より  $\Delta \beta \cdot R \int_{a}^{\pi} \hat{y}^{2}(\varphi) d\varphi - \frac{c}{D} \int_{a}^{\pi} \hat{w}(\varphi) \hat{y}(\varphi) d\varphi = -\frac{MR(1-\nu^{2})}{2trE}$ .....(12) 

をうる。したがって

以上で未知数はすべて決定されたから曲げ応力  $\sigma_{\beta}$ ,  $\sigma_{\varphi}$ は  $\sigma_{\beta} = E \varepsilon_{\beta}$ ,  $\sigma_{\varphi} = E \varepsilon_{\varphi}$  から求められる。

#### 3. 直線断面の推動殼

次に Fig. 2 のような断面の形が直接状の推動数 につ いてその曲げ応力を求める。 R: 図心線上の半径, 2l: 板巾, t: 板厚,  $\alpha$ : 傾斜角, その他前節で用いられた 記号は前節と同じ意味を持つ。座標は板に沿って x 軸, 板に垂直で中心方向を正方向に y 軸をとる。前と同様の 仮定 にもとづき 中立軸 からの 距 離  $y(x')=x' \sin \alpha$ , ( $\alpha \ge 0$ ) に比例する偏平化力 cy(x') を考え, この偏 平化力による曲げモーメントmは

 $m(x) = \frac{c}{12}\sin 2\alpha (x^3 - 3l^2x + 2l^3) = \hat{cm}(x) \cdots (16)$ 

はりのy軸方向の変位 $\delta(x)$ は上版式を $d^{2}\delta(x)/dx^{2}$ +m(x)/D=0に代入することによってえられる。その 一般解は

 $\delta(x) = -\frac{c}{12D}\sin 2\alpha (x^5/20 - l^2x^3/2 + l^3x^2 + Ax + B)$ 境界条件から A=0, B=0 をうるので

$$\delta(x) = -\frac{c}{12D} \sin 2\alpha \cdot x^2 (x^3/20 - l^2 x/2 + l^3)$$
  
=  $-\frac{c}{2} \hat{\delta}(x)$  .....(17)

 $U = \frac{E}{1-\nu^2} \int_{0}^{t} \int_{0}^{\frac{t}{2}} (\varepsilon^2 + \varepsilon^2 x) dx dz$ 

 $c = \frac{MR}{24k} t^2 \cos \alpha \int_0^l y(x) \hat{\delta}(x) dx \quad \cdots$ 



Fig.2 Straight section shell.

••••••(22)

この部材に加えられた曲げモーメント*M*による繊維方向 のひずみ  $\varepsilon_{\beta}$  および x 軸方向のひずみ  $\varepsilon_{x}$  は、それぞれ  $\varepsilon_{\beta} = \frac{y}{R} \cdot \frac{\Delta\beta}{\beta} - \frac{\delta(x)}{R} \cos \alpha = y \cdot \Delta\beta + \frac{c}{RC} \hat{\delta}(x) \cos \alpha \cdots (18)$  $\varepsilon_{x} = \frac{z}{D} \hat{m}(x) = \frac{c}{D} \hat{z} \hat{m}(x) \cdots (19)$ この場合、殼の単位長さに貯えられる歪エネルギー*U*は

$$e = \int_{0}^{t} y^{2}(x) dx \int_{0}^{t} \left\{ \cos^{2} \alpha \cdot \hat{\delta}^{2}(x) + \frac{(tR)^{2}}{12} \hat{m}^{2}(x) \right\} dx - \left\{ \cos \alpha \int_{0}^{t} y(x) \hat{\delta}(x) dx \right\}^{2}$$

をうる。したがって曲げ応力  $\sigma_{ extsf{ heta}}$ ,  $\sigma_{x}$ は21, 22式を(18), (19式に代入して  $\sigma_{ heta} = E arepsilon_{ heta}$ ,  $\sigma_{x} = E arepsilon_{ heta}$  から求められる。

# 誤差評価(比較関数としてフーリェ級数を用いた場合との比較)

本節では弾性体の変形問題を変分法で解く場合普通行 われるように、その比較関係(変位)としてフーリェ級 数を用いた場合と本報の材料力学的近似解法との差異の 評価を曲り円管と半円形断面の推動殻を例にとって解析 的に行った。

まず曲り円管についてその断面の変位関数 *u* として次 のようなフーリ<sub>x</sub> 級数を用いた場合を考える。 また断面の中心線の不伸長条件  $u=dv/d\varphi$  および境界 条件 v=(0)=0,  $v(\pi)=0$  から

$$v(\varphi) = r \sum_{n=1}^{\infty} \frac{a_n}{n} \sin u \varphi$$
 .....(24)

なお記号はすべて前節までと同じ意味を持つ。そして, ひずみ成分として前(7), (8)式に相当 するものを考えれ ば,この場合のひずみ成分を  $\varepsilon_{\beta}$ ,  $\varepsilon_{\varphi}$  は次のようにな る。 Bulletin of Nagoya Institute of Technology Vol. 19 (1967)

よって曲り円管の単位長さにたくわえられるひずみエネルギーUは

 $\lambda = tR/r^2$ 

$$\begin{aligned} U &= \frac{rE}{1-v^2} \left\{ \int_0^{\pi} \int_{-\frac{t}{2}}^{\frac{\pi}{2}} (\varepsilon^{2_{\beta}} + \varepsilon^{2_{p}}) d\varphi dz \\ &= \frac{\pi t r^3 E}{1-v^2} \left[ \frac{AB^2}{2} + \frac{a^2_1}{R^2} - \frac{3}{4} \cdot \frac{AB}{R} a_2 + \frac{1}{R^2} \left\{ \frac{5}{16} a^2_2 + \frac{5}{18} a^2_3 + \frac{17}{64} a^2_4 + \frac{13}{50} a^2_5 + \frac{37}{144} a^2_6 + \frac{5}{32} a_2 a_4 + \frac{1}{4} \sum_{n=7}^{\infty} (1 + \frac{1}{n^2}) a^2_n + \frac{1}{5} a_3 a_5 + \frac{7}{32} a_4 a_6 + \frac{1}{4} \sum_{n=7}^{\infty} \frac{(n-3)(n+1)}{n(n-2)} a_{n-2} a_n + \frac{\lambda^2}{24} \left( 9a^2_2 + 64a^2_3 + 252a^2_4 + 576a^2_5 + 1225a^2_6 + \sum_{n=7}^{\infty} (1 - n^2)a^2_n \right) \right\} \right] \end{aligned}$$

ここに

無荷重状態に対するポテンシャル・エネルギー I について  $\partial I/\partial \Delta B = 0$ ,  $\partial I/\partial c = 0$  (m=1, 2, ……6),  $\partial I/\partial a_n = 0$  から  $\Delta B$ ,  $a_1$ ,  $a_2$ , …… $a_n$  を解けば

$$a_{1}=0, \quad a_{2}=-\frac{MR}{EI_{x}}(1-\nu^{2})\frac{1}{\frac{1}{12}+\lambda^{2}}\left(1-\frac{175}{512}\cdot\frac{1}{k}\right)$$

$$a_{4}=\frac{MR}{EI_{x}}(1-\nu^{2})\frac{5}{8}\left(\frac{37}{6}+1225\lambda^{2}\right)\frac{1}{k}$$

$$a_{2m+1}=0 \quad (m=1, 2, \dots)$$

$$a_{2n+4}=-\frac{\{(n-3)(n+1)/2n(n-2)\}}{\left\{\left(1+\frac{1}{n^{2}}\right)+\frac{\lambda^{2}}{6}(1-n^{2})^{2}\right\}}a_{2n+2}, \quad (n=1, 2\dots)$$

$$k=\left(\frac{1}{12}+\lambda^{2}\right)\left(\frac{17}{8}+75\lambda^{2}\right)\left(\frac{37}{6}+1225\lambda^{2}\right)+\frac{21}{64}\left\{\frac{25}{24}-7\left(\frac{1}{12}+\lambda^{2}\right)\right\}$$

$$d\beta=-\frac{M}{EI_{x}}(1-\nu^{2})\left(\frac{10+12\lambda^{2}}{1+12\lambda^{2}}-\frac{3}{\frac{1}{12}+\lambda^{2}}\cdot\frac{175}{2048}\cdot\frac{1}{k}\right)\dots$$
(30)

ここに

 $I_x$  は図心を通る x 軸に対する断面二次モーメントで  $\pi tr^3$  である。 これでフーリ  $_x$  級数の係数および曲り円 管の角変位が求められたので変位 u, v およびひずみ成 分  $\varepsilon_{\theta}$ ,  $\varepsilon_{\theta}$  は決定された。

次にこの問題を本報の近似当解法によって求めれば変 位 *u*, *v* は

$u(\varphi) = -c \cdot \frac{r^5}{3D} \cos 2\varphi \cdots \cdots \otimes 3$	I)
$v(\varphi) = -c \cdot \frac{r^5}{6D} \sin 2\varphi \cdots \qquad \Im$	2)

比例定数には

 $c = \frac{MRt^2}{\pi t^7} \cdot \frac{3}{1+12\lambda^2}$ 角変位量  $\Delta \beta$  は

$$\Delta \beta = -\frac{M(1-\nu^2)}{EI_x} \left(\frac{10+12\lambda^2}{1+12\lambda^2}\right) \dots (34)$$

となる。

は、式の c の意味は  $7 - y_{\pm}$  級数  $a_2$  の第一項 2 - 3し、近似解によればそれ以下の項が入ってこないが、こ の級数は (2) 式の示すごとく 収束性がよく 十分無視でき る。また(3)式の角変位量  $\Delta B$  は(3)(3)式の括弧中の第一項と 一致し、近似解によれば第二項が入っていない。結局、 この近似解法と変位関数として  $7 - y_{\pm}$  級数を用いた場 合の解との相違は曲り管の半径 Rと断面のディメンショ ンとの比を表わす値  $\lambda = Rt/r^2$  のみに関係し、  $\lambda$  があ まり小さすぎない範囲、すなわち曲り管の曲率半径が断



面の寸法に対してあまり小さくない場合には近似解の誤 差は小さい。 すなわち  $\lambda=0.05$  では15%であるが  $\lambda=$ 0.1 以上では6%以下になる ( $\lambda=0.2:0.8\%$ ,  $\lambda=1:$ 0.00013%)。

以上のように円管の場合には、フーリェ級数の係数の

一般項を203式のように求めることができたが,一般推動 酸においてはこれは非常に困難になる。例えば半円形断 面の場合についてその変位関数を

$$u(arphi)=r(a_0+\sum_{n=1}^{\infty}a_n{
m cos}narphi)$$
 ………(35)  
とおけば前節と同様にして応力は次式で表わされる。

$$\sigma_{\varphi} = \frac{Er}{R} \Big[ \mathcal{A}\beta R\Big(\frac{2}{\pi} - \sin\varphi\Big) - \sum_{n=1}^{\infty} a_n \Big\{ \frac{1}{n} \Big( \sin n\varphi - \sin \frac{\pi}{2} n \Big) \cos\varphi - \cos n\varphi \sin\varphi + \Big( \sin \varphi - \Big(\varphi - \frac{\pi}{2}\Big) \cos\varphi \Big) (1 - n^2) \Big\} \Big] \cdots \Im$$

$$\sigma_{\varphi} = -\frac{Ez}{r} \sum_{n=1}^{\infty} a_n (1 - n^2) (\cos n\varphi - 1)$$

しかし、この級数の係数を求めるには前と同様に Rayleigh-Ritz の方法によって導かれた ΔB, a<sub>1</sub>, a<sub>2</sub>…… に関す る多元一次連立方程式を解かなければならない。

$$\hat{w}(\varphi) = \hat{v}(\varphi)\cos\varphi - \hat{u}(\varphi)\sin\varphi$$

$$f(\gamma) = \frac{\gamma}{2} - \frac{\gamma^2}{2\pi} - \frac{13}{6\pi} - \left(\frac{3}{8}\pi + \frac{1}{\pi}\right)\cos\gamma - \left(\frac{3}{4} + \frac{2}{\pi^2}\right)\gamma\cos\gamma + \frac{5}{2\pi}\cos^2\gamma$$

応力は

$$\sigma_{\beta} = E\left\{\frac{c}{D} \cdot \frac{\hat{w}(\varphi)}{R} - \Delta\beta \cdot \hat{y}(\varphi)\right\}$$
  
$$\sigma_{\varphi} = E\frac{c}{D}\hat{zm}(\varphi)$$

で求められる。

#### 5. 応用例

前2,3節の方法を組み合せれば、断面形が円弧と直 接からなる任意の推動殻の曲げ応力を求めることができ る。但し断面形が複雑になると中立軸が図心を通るとい う仮定は不適当になり、まず中立軸の位置を求めなけれ ばならない。以下この問題を中心にロードレーサー自転 車車輪用リムを例にして解析する。

記号および座標を Fig 4 のようにとり、中立軸の位置を e で表現し、計算すれば Fig 5 の各応力成分は



Fig.4 Cross Section of rim for light bicycle.

Bulletin of Nagoya Institute of Technology Vol. 19 (1967)



Fig.5 Stress component.

 $\sigma_{11} = E \Big[ \Delta\beta \{ H_1 - H_2 + e + r(1 - \cos\varphi) \} - c_1 \frac{r^4}{DR'} \hat{w}(\varphi) \Big] \\\sigma_{12} = E \Delta\beta y_2 : -(H_2 - e) \leq y_2 \leq e \\\sigma_{13} = E \Big\{ \Delta\beta (e - H_2) + c_3 \frac{\hat{\delta}(x)}{R'} \Big\} \\\sigma_{21} = -E \frac{z}{D} c_1 \hat{m}(\varphi), \ \sigma_{22} = 0, \ \sigma_{23} = -E \frac{z}{D} c_3 \hat{m}(x) \Big\}$ ...(40) で表わされ  $\Delta\beta, \ c_1$  および  $c_3$  は前と同様リッツの方法によっ

で表わされ  $\Delta B$ ,  $c_1$  および  $c_3$  は前と同様リッツ の万法によっ て得られた次の  $\Delta B$ ,  $c_1$ ,  $c_3$  に関する連立方程式を解くことに よって得られる。

$$\begin{split} \mathcal{\Delta}\beta R' \Big[ r \int_{0}^{a} \hat{y}^{2}_{1}(\varphi) d\varphi + \frac{1}{3} \Big\{ e^{3} - (e - H_{2})^{3} \Big\} + \frac{r \sin \alpha}{R'} (R - H_{2})^{3} \Big] + c_{1} r \int_{0}^{a} \hat{y}_{1}(\varphi) \hat{w}(\varphi) d\varphi \\ & - \frac{c_{3}}{R} (R - H_{2}) (e - H_{2}) \int_{0}^{r \sin \alpha} \hat{\delta}(x) dx = -\frac{MR'(1 - \nu^{2})}{2tE} \\ & \frac{\mathcal{\Delta}\beta}{R'} \int_{0}^{a} \hat{y}_{1}(\varphi) \hat{w}(\varphi) d\varphi + c_{1} \int_{0}^{a} \Big\{ \frac{\hat{w}^{2}(\varphi)}{R'^{2}} + \frac{t^{2} \hat{m}^{2}(\varphi)}{12D^{2}} \Big\} d\varphi = 0 \\ & - \frac{\mathcal{\Delta}\beta}{R'} (e - H_{2}) \int_{0}^{r \sin \alpha} \hat{\delta}(x) dx + c_{3} \int_{0}^{r \sin \alpha} \Big\{ \frac{\hat{\delta}^{2}(x)}{R'^{2}} + \frac{t^{2}}{12D^{2}} \hat{m}^{2}(x) \Big\} dx = 0 \end{split}$$

ここに

$$\begin{split} \hat{\psi}_{1}(\varphi) &= H_{1} - H_{2} + e + r(1 - \cos\varphi) \\ \hat{\psi}(\varphi) &= f(\alpha) + F_{4}(\varphi)(\cos\varphi + \varphi \sin\varphi) - F_{3}(\varphi)(\cos\varphi - \frac{\varphi}{4}\sin2\varphi + \varphi \sin\varphi + \frac{\varphi}{4}\sin\varphi\cos2\varphi - \frac{1}{8}\sin\varphi\sin2\varphi) \\ &- (H_{2} - H_{1} - e - \frac{5}{4}r)(\cos\varphi + \varphi \sin\varphi) - \frac{1}{4}(H_{1} - H_{2} + e + r)(5\sin^{2}\varphi - \varphi \sin\varphi - \varphi^{2}) + \frac{r}{12}(\cos\varphi\cos2\varphi + \frac{1}{2}\sin\varphi\sin2\varphi) \\ &+ \frac{1}{2}\sin\varphi\sin2\varphi) \end{split}$$

$$\begin{split} \hat{m}(\varphi) &= r^{2} \{F_{4}(\alpha) + F_{3}(\alpha)(1 - \cos\varphi) - (H_{2} - H_{1} - e - \frac{5}{4}r) - (H_{1} - H_{2} + e + r)(\varphi \sin\varphi + \cos\varphi) - \frac{r}{4}\cos2\varphi\} \\ f(\alpha) &= (H_{2} - H_{1} - e - \frac{5}{4}r - F_{4}(\alpha))(\cos\alpha + \alpha \sin\alpha) + F_{3}(\alpha)(\cos\alpha - \frac{\alpha}{4}\sin 2\alpha + \alpha \sin \alpha + \frac{\alpha}{4}\sin\alpha \cos2\alpha - \frac{1}{8}\sin\alpha \sin 2\alpha) + \frac{1}{4}(H_{1} - H_{2} + e + r)(5\sin^{2}\alpha - \alpha \sin2\alpha - \alpha^{2}) - \frac{r}{12}(\cos\alpha \cos2\alpha - \frac{1}{2}\sin\alpha \sin2\alpha) \\ F_{1}(\alpha) &= (H_{2} - H_{1} - e - \frac{5}{4}r)\alpha + (H_{1} - H_{2} + e + r)(2\sin\alpha - \alpha \cos\alpha) + \frac{r}{8}\sin2\alpha \\ F_{2}(\alpha) &= (H_{2} - H_{1} - e - \frac{5}{4}r)\sin\alpha + \frac{1}{2}(H_{1} - H_{2} + e + r)(\alpha + \frac{3}{4}\sin2\alpha - \alpha 2\cos2\alpha) + \frac{r}{8}(\sin3\alpha/3 + \sin\alpha) \\ F_{3}(\alpha) &= \{\alpha F_{2}(\alpha) - F_{1}(\alpha)\sin\alpha\} / (\sin^{2}\alpha - \alpha^{2}/2 - \frac{\alpha}{4}\sin2\alpha) \\ F_{4}(\alpha) &= (\sin\alpha/\alpha - 1)F_{3}(\alpha) + F_{1}(\alpha)/\alpha \\ \hat{\delta}(x) &= \frac{(H_{2} - e)r^{2}\sin^{2}\alpha}{6D} - \left(\frac{x^{4}}{4r^{2}\sin^{2}\alpha} - \frac{x^{3}}{r\sin\alpha} + x^{2}\right) \\ \hat{m}(x) &= (e - H_{2})r^{2}\sin^{2}\alpha\left(\frac{1}{3} - \frac{x}{r\sin\alpha} + \frac{x^{2}}{2r^{2}\sin^{2}\alpha}\right) \\ \end{split}$$

これまでの計算式中に含まれる中立軸の位置を示す e は未知であったが応力の釣合いから次の条件を満足 しなければ ならない。すなわち

$$\int_{0}^{\alpha} c_1 \hat{y}_1(\varphi) d\varphi + c_3 (H_2 - e) r \sin \alpha = 0$$

これから

$$e = \frac{c_1 \{r \sin \alpha - (H_1 - H_2 + r)\alpha\} + c_3 H_2 r \sin \alpha}{c_1 \alpha + c_3 r \sin \alpha} \dots (42)$$

したがって、まず e を適当に仮定し、数値計算して  $c_1, c_3$  を求め、これらを (2) 式に代入して e を求める。 これと仮定した e と比較してもし相違していたならば改 めて e を仮定しなおすというふうに try and error で e を探し求める。

#### 6. 測定および数値計算

Table 1 のような 4 種の曲り円管について軸ひずみを 抵抗線ひずみ計で測定し軸応力を求めた。Fig 6 はその 結果と理論解析の結果とを比較し示してある。負荷モー メントは曲率を減少させる方向に加え, aは曲り円管の 内側壁の軸応力, b, c, dは外側壁の軸応力を示して いる。測定値と理論値とはよく一致し, 軸応力は負荷モ ーメントの大きさに比例するという結果を得た。

次に半円形断面の推動殻について本報の近似的解法に よる場合と変位函数にフーリェ級数を用いた場合とを計 算し、比較検討した。Fig7は半円形断面の中央におけ

Table 1 (mm)

円管の種類			a	b	c	d
円管の曲率半径R			146	174	215	313
断面円の半径 r			15.2	18.2	24.7	30.5
肉	厚	t	1.7	1.6	1.6	2.0



Fig.6 Axial stress of tubes.

る軸応力をRおよびrをパラメータにとって負荷モーメ ント 1000kg-mm で計算した結果である。 フーリ<sub>エ</sub> 級 数による解はその項数が5項までであるため,本報の近 似解法による結果より小さくなっており,その点でも近 似解の結果は妥当なものと思われる。

Fig8 は4節で応用例として導いた計算式に従って、 Table2 のような軽自転車車輪用リムについて軸応力を







Fig.8 Stress of rims for bicycles.

計算した結果を示したものである。

#### 7. 結 言

これによって計算は大変簡単になり,また数値計算の 結果と実験値とはよく一致した。したがって一般に断面 形が直線と円弧から成っている推動殻で,特に曲率があ まり大きいというのでなければ,その変形と曲げ応力は この近似的解法で十分な精度をもって解析できると思わ れる。

終りに本研究に当り種々御指導賜りました鈴鹿工業高 等専門学校,岡田教授ならびに本学,織田教授に深く感 謝の意を表します。

- 1) Th. von karman, Zeit des Verenes deutscher Ingenieure., vol. 55 (1911), 1889—1895 Aug. Föppl und Ludwig Föppl, Drang und Zwang, (1924), 70-87, R. Oldenbourg.: 上論文の概容
- 2) S. Timoshenko, Amer. Soc. Mech. Eng., vol. 45

- 171 -

-4

(1923), 135

- L. G. Brazier, Royal Society of Aeronautics, Reports and Memoranda, vol. 213, no, 1018, (1926), 187
- 4) J. D. Wood, Journal of Applied Mechanics, vol.
- 25, Trans. ASME, vol. 80, (1958), 453-458
- 5) F. P. J. Rimrott, Journal of Applied Mechanics, vol. 33, (1966), 75
- E. Reissner, Journal of Applied Mechanics, vol, 26, Trans. ASME, vol. 81 (1959), 386-392